

成佛の道と業

——般若經と涅槃經を中心に——

横 超 慧 日

佛教に従えば、人は煩惱によって業をおこし、業によって苦果を招くと云われる。煩惱と業と苦と、この三者一連の関係から云えば、苦を招く直接の原因は業であって、煩惱は間接の原因のように見える。しかし業も単なる業でなくて煩惱に基づく業であるところに、苦を招く決定的性格が生じる。それゆえ、業の名を表へ出さず、直ちに煩惱によって苦ありと説かれることが多い。わざわざ例を挙げるまでもないけれども、一文を引いておこう。

無智者錯乱 迷惑不受教 我知此衆生 未曾修善本 堅著於五欲 癡愛故生惱 以諸欲因縁 墜墮三惡道
輪回六趣中 備受諸苦毒 (法華經方便品)

佛教は、このような煩惱による六趣輪廻の存在を憐み、苦悩の生活から人々を救出しようというのが目的である。しかし人々の心にまきつき縛りつけて、善へ向う心を妨げつつける煩惱の鉄鎖は、果してこれを断ち切ることができぬものであろうか。若し断ち切ることができないものならば、苦は永劫につづき解脱は望めない。佛の教はそれが可能であるからこそ、大慈悲心を以て人々を解脱に導くためにつづけられたに相違ない。佛のさとりを信じ佛の

願を信ずる限り、凡夫が煩惱・業・苦の流転から脱出できる可能は必ず残されているはずと思われるが、その可能はどうしたら見出されるであろうか。煩惱を断じ尽して三界から出たと信じている阿羅漢にも、本人にはまだ全く気のつかぬ煩惱の余習が残存していると聞かされると、具縛の凡夫には、自己の心を見つめれば見つめるほど解脱への望みを持ち得なくなる。それでは佛の教にどのように従ってゆけば、煩惱の鉄鎖を断ち切るという難事に希望を持つことができるようになるのであろうか。

一

先ず大乘の般若経を見よう。般若経によれば、空と相應する空行の菩薩にして能く佛国土を淨め衆生を成就し疾く阿耨多羅三藐三菩提を得ることができると説かれる（習応品第三）。又、般若波羅蜜を行ずる時、行・不行・行不行・非行非不行のどんな想念をも持たず、想念を持たぬという想念も持たぬ、そのような諸法無所受の三昧にあって初めて疾く阿耨多羅三藐三菩提を得られるとも説かれている（行相品第十）。ここでは煩惱の断不断については言及されていないが、阿耨多羅三藐三菩提を得るといふのは人生の真実に達して完全に苦より解脱した境地に到達することに他ならぬから、ここで般若波羅蜜を正しく行ずる菩薩が疾く阿耨多羅三藐三菩提を得られると説かれている所から推して、一切法空を如実に観ずる修道こそが煩惱・業・苦の流転より解脱する確実な道だということになる。般若波羅蜜を行ずる時、菩薩は自分が行じているという意識を持たぬ。行じているという意識を持たぬというのであるから、行じていないということも、行じてもおりに行じていないのでもありということも、行じておらず行じておらぬでもないということも、そうした一切の分別心を全く持っていない。分別心である想念を持たず、そうした

想念を持たぬというそういう想念も持たぬのである。いったい分別心・想念というものは自ら意識すると否とに拘らず、すべて自我という潜在的な我執のもとにおいて発動する。それ故、般若波羅蜜を行ずるということは完全な無我の立場に立つことだと言つてよい。苦をもたらず煩惱はどうか。それはすべて我執の上に成り立つ。煩惱が苦の根源であるというのは、我執に立つ一切の自己本位（煩惱）で自己中心的な行為（業）が、人間にとってあらゆる苦悩の終極の原因だということになる。そこでこのように見えてくると、般若波羅蜜を行ずる時に、煩惱や業から苦が導き出されるという確かな鉄則はそのまま鉄則として認められながら、いな、それゆえにこそ煩惱対治・苦悩除去を問題にしないままで、おのずから煩惱なく、煩惱に基く業なく、当然そこにおこる苦悩からも完全に解脱した真の涅槃が約束される、ということが首肯される。もちろん私のこういう首肯云云という言い方は般若の觀念化であつて行の立場ではないけれども、ともかく煩惱対治・苦悩除去を正面から問題とせぬに拘らず、自然にそれが達成される。これが般若経の解脱論である。

般若経の中で業の問題をとりあげて議論しているところとして、四諦品第八十四を注意すべきであらう。

前の畢定品第八十三において、六波羅蜜を初めとし以下佛の十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法に至るまですべてそうした功德はみなこれ阿耨多羅三藐三菩提の道であると説かれた。そこでこの四諦品ではそれを承けて、若しそのようにこれらの諸法が菩薩の法だというならば、何が佛法だということになるか、菩薩法と佛法との相違がわからなくなるのではないかとということで、先ず問題が提起された。その答は次の如くである。即ち、菩薩の法はまたこれ佛法でもある。若し一切種を知ったならば一切種智が得られ一切の煩惱習を断ずることになるからであ

って、菩薩というのはこの先に（今後）この法を得る者のこと、佛というのは一念相應の慧を以て一切法を知り阿耨多羅三藐三菩提を得た者のこと。即ち菩薩と佛とは、今後に得る者と已に得た者という段階の別であって、本質的に道を異にするものではない。声聞における向道と得果との別の如くであり、無礙道中にある時を菩薩といい、解脫道中にある時を佛という別に過ぎない。

しかしそうになると、今度は又それに関連して、別の問題が出てくる。一切法は自相空だとこれまで説かれてきたが、自相空だというのに地獄・餓鬼・畜生・天・人の五道を初めとし、性地の人・八人地の人・須陀洹の人・斯陀含・阿那含・阿羅漢の人・辟支佛・菩薩・佛というように多くの差別があるというのはどうしたことか。一切法空だという以上、諸人の不同はあり得ない筈であり、業・因縁ということもまたその果報ということも空であり不可得とならねばなるまい。この点はどう理解したらよいのか。これが問題となってきた。業のことがここで若干論及されることになったのである。今上述の疑問はどう解かれているかを見るに、そこでは次のように答えられている。

たしかに一切法は自相空だから、その観点から言えば衆生もなく業因縁もなく果報もないということになる。しかるに衆生はそうした諸法自相空であることを知らない。そのような諸法自相空であることを知らぬというそのこと（無明）が衆生をして業を作らせる因縁となるのであって、罪業だとか福業だとか無動業だとかいうような色々の業の差別がそこからおこってくる。罪業のものは三惡道へ墮し、福業のものは人天中に生まれ、無動業のものは色界が無色界かへ生まれる。これに対し菩薩は六波羅蜜乃至十八不共法を行ずる時に金剛三昧の如くこの助道の法を尽く受行するから、阿耨多羅三藐三菩提を得て衆生饒益ということを続け、六道生死に墮することがない。要す

るに、業を作つて種々の果報を受けるといふことは、自相空の般若波羅蜜を学ばない者の上においておこることであつて、菩薩にとつてはそうしたことは全くあり得ないといふのである。

しかしここでまだ問題がすべて解決したわけではない。何故ならば、菩薩は業を作り果報を受けるといふことがないにしても、佛は六道の衆生を救うために六道生死の中へ進んで入つてゆかれるではないか。そうすると佛と六道生死との関係は、もう一步つきこんではつきりさせておかねばならぬ。そこで今度は、議論が次のように進められることになった。

佛は阿耨多羅三藐三菩提を得たのであるから、その境地の佛に六道生死などのあり得る筈はない。また業についても、黒業にせよ、白業にせよ、黒白業にせよ、不黒不白業にせよ、どんな業もあるとは考えられない。しかるに現実においては地獄・餓鬼・畜生から阿羅漢・辟支佛・菩薩・諸佛というように多くの別があることも否定できぬ。そうしてみれば佛が六道の生死を認めてその中で衆生を救おうとせられることと、佛が六道生死及びその因縁となる業の差別を超えているということと、この二つの事はその間に矛盾が感ぜられるではないか。とにかくこのところが明瞭な判断がつきかねるように思われる。しかし私の理解にして誤なければ、經はここでこの点を次のように説明しているようである。

衆生は、「諸法が自相空だというならば、菩薩が阿耨多羅三藐三菩提を求めるといふことはないだろう、そしてまた衆生を三惡趣から抜くために六道生死の中を往来するといふこともないだろう」と考える。だがしかし若しそのように考えたとしたならば、それは本当に諸法自相空といふことを知ったことにならぬ。実は判っていないのだ。だから六道生死を自分自身が脱することのできぬ立場に立つてそのように判断しているに過ぎない。菩薩は、佛の

所で諸法自相空を聞いたならば、阿耨多羅三藐三菩提を求めようという心を発す。凡人は、無所有法の中に顛倒妄想して法があるように分別し、衆生がないのに衆生ありと思い、色受想行識はないのに色受相行識がありと思い、すべてそうした有為法は無所有であるのに顛倒妄想の心をもって身口意の業をなす。そうした因縁によって六道生死の中に往來することになる。さればこそ六道から脱することが出来ぬことになるのだ。これに反し菩薩は一切善法の内の般若波羅蜜中に菩薩道を行ずるから、阿耨多羅三藐三菩提が得られるのであり、又阿耨多羅三藐三菩提を得た上で衆生のために四聖諦を説くことになる。そしてその為に佛法僧の三宝を説くということになったのである。従って三宝を信ずるならば六道生死を離れることが出来るけれども、反対に信じないで拒否するようなことでは六道生死を離脱することはとうていできないという。

あらましの趣旨は、解説的に紹介した上述の如くであると思う。そうしてみると、結局、般若経の立場からすれば、菩薩は正しく般若波羅蜜によって自相空を行ずる限り業因縁によって自らが六道の中に墮するということはない。しかも真に自相空を知るということは、空なるが故に求むべき菩提もなく救うべき衆生もないというようなそのような執われた見地に立ってのものではないのであるから、般若波羅蜜に立って空にも執われぬところの菩薩行の中に於てのみ自然に阿耨多羅三藐三菩提が得られ、ひいて衆生のための四諦説法も進められるのである。そのような方こそが実は真に自相空を正しく学び行ずるものと言えるという。経の主張は凡そこのようなことであつたと思われる。

二

さて大乘經典の中でもすべての源頭に立つと思われる般若經を中心に、些か業の問題を紹介した。極めて概略な言い方をすれば、維摩經や法華經などこれら初期の大乘經典は、自他すべての衆生を救うのが菩薩精神の究極理想であることを強調し、そのための無所得空とその上に成り立つ衆生教化もみな方便の力を仮ることによって円満に成就することを主張しており、その点において兩經ともに般若經の正統的展開だと言ってよいであろう。

それでは般若・維摩・法華等に比して次の段階に入ると思われる第二期の諸經では、煩惱・業の課題はどうなっているであろうか。問題とその範囲は甚だ大きいので簡単な結論は出せないが、しばらくここに涅槃經を代表的な例としてその中から注目すべき論点を紹介しておくことにしよう。

大乘の涅槃經は、釈尊の入滅という事実伝記の叙述を目標としているのではなく、佛教の理想たる涅槃についてその誤られた見解を正し、真の正しい意味をどこまでも追究してゆこうとした努力の集積とも考えられる。經が幾多の断層編集の形を以てまとめられているのはそのためである。經によれば、佛をして佛たらしめている本質は法身であり佛性である。釈尊はこれあるにより佛となられた。釈尊の色身は入滅によって世を去られたとしても、法身は不滅である。それが不滅であるということは、法身が普遍常住の法であることを意味する。そうだとすればそれは釈尊だけにあったのではなく、あらゆる衆生にもみな本質上具備していると見なければならぬ。それは覺られた法性の普遍性という点から言っても、佛陀の教化目的が拠って立つ根拠という上から言っても、疑えないところであろう。このように考察する時、推しつめて言えば、すでに佛となった釈尊や今現に佛を求めて修行しつつある

菩薩にのみ佛性があるのでなく、まだ全く佛道を求める心さえ発していない凡夫においてもまた、同じく平等に佛性を本具していると考えざるを得ない。若しそうでなかったならば、佛陀が凡夫を佛にしようとして法を説くということが全く無意味なことになってしまうからである。

以上のようにして佛陀の死を通して生身佛陀の根底にあると見られる佛の本質を考え、又佛の教を受ける凡夫の現実と求道の上の目的とせられる理想の佛との不即不離なる関係を考えるということ、それが涅槃經において如来常住と悉有佛性との二大眼目として結論づけられることになった。そして如来常住と悉有佛性とは実は別個の問題ではないのであるが、如来の入滅を通して到達した法身常住の説よりも佛道を求める我々凡夫の者にとって直接関係の深い最大の関心事は何よりも先ず悉有佛性ということであろう。悉有佛性というならば、私も佛性を本具しているに相違ない。しかし私が現に苦悩し呻吟しつつ迷界生死の中に流転していることはまぎれもない事実である。それでは佛性はあると言っても、どうしてあると言えるのか。どこを探しても自己の中に佛性などがあるとは考えられない。そこでこのような理想と現実・理論と実際との相克の中から見出されてきたのが、佛性は本来具わっているにもかかわらず煩悩に覆われているため凡夫は自らそれを知ることができぬのだという説であった。煩悩に覆われている佛性を開顯するための修行が当然ここから要求されることになる。涅槃經の上でいうならば、积尊入滅の雙樹を場面として如来常住を説く寿命品から始まった経が、悉有佛性を力説する如来性品に展開した後、次いで理論より実践に移って聖行品・梵行品へと進まねばならなかった理由はここにある。

経は如来性品において一切衆生悉有佛性と断定したけれども、そこには大きな難関が二つ横たわっていた。一つは一闡提であり、今一つは二乗である。悉有佛性だと言ってみても、さればとて佛性を信ぜぬ者も佛性があるとの

理由で自然に成佛できるのか。不信の者は絶対に法の埒外に排除しなければならぬが、しかも排除して事足りるというものではあるまい。何よりもそういうことでは悉有佛性という經典自体の最大眼目と基本線に於て矛盾する。そのことへの苦悶はこれが断じて看過することの絶対許されない課題であることを示す。如来性品の最大の課題は実にここにあった。涅槃經全体の一貫した焦点も、悉有佛性と表裏しつつ常に不離の関係を以て迫ってくるこの一闡提に在ったと言つてよい。

今一つの難関は二乗である。二乗は佛性の説に対して不信とか拒否の態度をとるというのではないが、それを知らず声聞としての自己の修道につとめ自ら阿羅漢・辟支佛となることに満足している。彼等の如きは佛性ありと雖も自らそれに気づかないために、自分でことさら成佛への道を閉ざしていることになる。般若經が、諸法の自相空を知らぬために衆生が自ら業因縁により六道中の生死を離れることができぬと言っているのに比してどうか。本来諸法は自相空であると般若經によつて説かれた内容が、今や涅槃經では一切衆生悉有佛性と説かれることになった。この兩者の關係は單に形式上の類似という解釈だけですまされてよいものでなからう。むしろ兩者の間には般若思想追究の深い伝統が流れていると見なければならぬ。ただ、今ここではそれを詳論する余裕がないのでこれを別の機会に譲ることにした。

いずれにもせよ如来性品で悉有佛性の宣言が喚起した課題は一闡提の成佛可能如何ということと、二乗特に声聞乘の行者を如何にして大乘へ転向させるかということであった。聖行品・梵行品が大乘菩薩行を別して利他面に於て強調しているのは、声聞に欠く所として菩薩の大慈悲心が佛道の本質であることを明かにし、以て二乗声聞乘に對し攝取導入の道を開いたものであった。二乗が八六四二万十千劫を経て發菩提心するという現病品の説は、これ

を別の観点から傍証したものと云えるであろう。しかし何よりも更に大きな問題は、四無量心の強調が極愛一子地の議論にまで進み、ついに菩薩の大悲は必死不可治の人である一闍提をも放置するものではないと断言したことである。

如来性品は、悉有仏性を主張しながら、不信者の闍提に対して成佛の可能を除外した。これは佛道において信というものが宗教的生命の死活を決める鍵ともいふべき重大なものであることを極論しているのである。その点において、それが浄土教信仰の成立にとって寄与する所絶大であったことを否定できない。そうした信の力説のあとで今度は梵行品で菩薩の大悲、極愛一子地が強調されたのであるから、涅槃経が愈々以て浄土教における佛の願力信順の信仰に大きな力を貸すことになったのである。佛への信順・佛菩薩による大慈悲、こういう二大眼目は、般若苦の三道流転により衆生の生死輪廻を説明する教学的理論の枠の内だけに佛教を止めておくことを許さない。般若経の自性空の主張はすでにすべての固定観念を打破していた。次の徳王品が闍提不成佛を極論した後につづいて、縁起無自性に立つ不定という論理を提起してきたのは正しくその現われである。ここでは四重・五逆・謗法と並んで闍提すらも成佛することを認めるようになった。闍提といってもそれは地位状態のことであって、地位状態である限り人はそこから絶対に脱出することのできぬという如き決定的なものではないのである。そこで闍提にも発菩提心ということはあり得る、その発菩提心させるものが佛菩薩の力であることを断言した。こうなってくると、因縁についての見解も佛性のはたらきとの関係において今や再検討されねばならぬことになる。次の師子吼品が正因・縁因の説や生因・了因の説を持ち出したり、業の論に関連して業不決定説を提示してくるのはそうした理由に由るものであった。

涅槃經の中で、業論がおこされるには以上のような過程が考えられる。それでは直接、業の問題のみに限定してここでどんな議論がくりひろげられたか、あらましの概観を紹介することにしよう。

涅槃經の師子吼品（南本經卷二十九）の中で、佛性に関連して果報の問題がとりあげられた。順序として前後の經緯を紹介すればこうである。

佛性を見ることができたならば、大涅槃を得て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることが出来る、ということを知っている。しかし一方では、畜生に施したならば百倍の報を得、一闍提に施したならば千倍の報を得、持戒者に施したならば百千倍の報を得、乃至如來世尊に施したならば得る所の福報は無量無辺であるということも聞いた。無量の報を受けるといふことになれば、果報は尽きることがないから何時になったら阿耨多羅三藐三菩提を得ることができようか、何時まで経っても施報無尽のために佛果が得られる時がないということになるがそれでよいか。又こういうことも聞いた。人が重心（強烈な心）で善業か惡業かをなせば、現世になるか次世になるかの別はあつても、ともかく必ずその果報を得ることは間違いないという。この点から言つたといふ善業にせよ重心でなした以上その報をどうしても受けねばならぬから、なかなか阿耨多羅三藐三菩提が得られぬことになる。同様のことは他にも往々に聞く。例えば、病人と父母と如來と、この三種の人に施したならば果報無尽であるとかいうではないか。更に欲界の業、色界の業、無色界の業など、そうした三界の業のない者にして初めて阿耨多羅三藐三菩提が得られるともいう。しかし我々のなす業で、三界内の業でないようなものがあり得るはずはない。法句の偈によれば、空へ行つても海へ行つても、山石の間に入つたとしても業（果）を受けないですむ所はあり得ないと説かれているの

を何としよう。阿尼樓駄は、一食を施したために八万劫中三惡道へ墮しなかつたと追憶している。一食の施でさえこのようであるとしたら、純陀の如きは信心を以て佛に施し檀波羅蜜を具足している。彼はいったい何時になつたら佛になることが出来る（阿耨多羅三藐三菩提を成ずる）のであろう。善業と同様に、惡業だって同じである。方等經を謗ったり、五逆罪を犯したり、四重禁を毀つたり、一闍提の罪を犯したりした者など、そういう者たちの罪業果報は尽きることがないのであるから、とうてい彼等が阿耨多羅三藐三菩提を成ずるといふ如きことは全然考えられぬではないか。これが問題提起の発端である。

これに対する答はどうか。佛の十力の中に業報を知る智力があるので知られるように、業というものは最も深いものである。それにもかかわらず業縁を輕視して信じない者がいるから、前述のような説がなされたのであるが、業一般について言えば次のようなことを心得ておかねばならぬ。即ちすべての業の中には輕い業と重い業とがある。その輕い業にも重い業にも、それぞれまた決定的なものと決定的でないものがある。世間には惡業をなしても果はないと主張する者がいて、その例として惡業の者と知られている者が生天の報を得たり解脱の果を得たりすることがあるではないか、という。しかしこれは業の中に、必ず得る所の果の決定的なものと、そうでない者があることを裏書する。しかるに、邪見の者はこれを以て惡業に果なしと言って業の因果を否定する自説の証とする。それ故そのような邪見を斥けるために、「一切の作業、果を得ざるなし」と説かれるのであつた。前に輕い業でも重い業でも果報を受けるに決定的なものとは決定的でないものがあると言つたが、このことを理解するために、更に次のことを知らねばならぬ。即ち、重い業をなしてもその果報を輕く受ける者と、輕い業をなしてもその果報を重く受ける者があるということである。但し、これはすべての人がみなそうだといふのではない。そうなるのは愚者

と智者との場合にそうなるのである。従つてこの点から言つて一切の業が悉く決定的に定まつた果を得るということにはならぬことが知られるであらう。決定的な果を得ないことがあるといつても、それは果を全く得ないということではないから、それを誤解してはならぬ。世には智人と愚人があつて、智ある人は、智慧力によつて地獄のやうな極重果報を受ける業をしておきながら、現世で軽く受けてすますことがある。反対に愚かな人は、現世で軽い業をしておきながら、後に地獄で重く果報を受けるということになる。

ここで一寸疑問が起る。若しそうならば、清淨の梵行を求めて修行したり、解脱の果を求めるといふことも、必要でなくなるのではないか。業報不定のことありといふことが、修道意欲を減退させるという危懼である。これに對して、經は次の如く説く。若しすべての業がその果報決定してゐるとするならば、梵行を修し解脱を求めても無益になる。不定であるからこそ梵行を修し解脱の果を求めることになるのではないか。確かに一切の惡業を離れば善果が得られ、善業を遠ざければ惡果が得られるに相違ないけれども、しかしあらゆる業が初からそれによつて得られる果が決定的であるとするならば修道は不要となる。しかも修道なくして解脱はあり得ない。このような理由により、一切の聖人が修道したのは、定業を壊して輕報を得るためであつたと理解しなければならぬ。

業について定業と不定業とがあることを前に説いたが、定業の中にもその定といふことについて二つの意味がある。一つは受ける所の報がどのようなものであるかといふことの定まつてゐるもの、今一つは報を受ける時がいつであるかといふことの定まつてゐるものである。従つて中には報の種類が定まつていても受報の時の不定なもの（縁が合した段階で報を受ける）があり、また中には時として現生に受けるか次生に受けるか更に後の生に受けるかといふ時の段階の定まつたものがある。それではどのようになした業が定業となるか。それは定心を以て善惡業

を作(な)すことによって定まる。佛果を求める上でいうならば、定心を以って善業と作し、作してから信心歓喜の念を生じ、若しくは誓願を發して三宝を供養する。そのようなのが定業となる。唯だ業にもこのような定業のみでなく、不決定のものもあるのであって、前にも述べた如く智者は深く堅固な善根により重業を軽からしめ、愚者は反対に不善の方が深厚であるから軽い業を作っておきながら重い報を受けるといことになる。かようなわけで業は定業と不定業とがあるのである。不定業があるといふことはしかしよく考えてみれば、業は必ず果報を受けるのであるが、その受報の報と時との可変といふことにより、一切諸業決定でないといふことができよう。

以上私は佛性論上から成佛の可能に関連して涅槃經が説く業論の一端を紹介した。「地獄は一定住家ぞかし」の凡愚が、三界を超えた浄土に往生し成佛することができるといふことは、この業の不定に立脚し、重業を輕受せしめる信心の智慧でなくて何であらう。涅槃經が説くその智慧とは、般若經の般若波羅蜜の智慧であり、それは別の名を以て信と呼ばれるものに他ならないのである。

(昭和四十九年度文部省科研「総合研究」による成果の一部)